

[1]

問一	⑦ 憤り				⑧ 墮落	⑨ 頻繁	⑩ 遭遇	⑪ 覆つ
	山	判	々	と				
問二	山	判	々	と	観	察	の	違
	村	向	と	観	光	綴	の	い
問三	の	か	書	き	開	の	に	が
	観	う	き	綴	発	に	対	明
問四	ら	ら	ら	ら	て	て	は	と
	ら	ら	ら	ら	て	て	は	と

藤田のエッセイには山の風景の変貌に対する憤りだけでなく、人間の自由な「遊び」が、保育器のように管理された、いわば「遊園地」のような空間に閉じこめられたという現代社会批判があるから。

武田の文章は、生きた人間を死んでいるように見せたり、人間のいない風景に人の生活の跡を見出したり、いつでも反転して他方の側を見せており、そこに筆者は死を敏感に意識し同時に人間や動物や自然環境の内に生命のかたまりを掘りあてる感性がうまく両立しているという魅力を感じている。

[2]

問一	⑦ さすが	⑧ ばとう	⑨ しょうそう	⑩ こがい	⑪ ずうたい
問二	引越しを機会にポチを置き去りにしようとする。ポチは皮膚病を発症したが、新居の建設が遅れ、皮膚病はますます悪化し、酷暑や不眠もあって「私」や妻は我慢の限界を迎えようとしていた。悪いことはすべてポチのせいだとポチを呪咀し、蚤をうつされた時点で、ついに怒りが爆発し、殺そうという決意に至ったわけだから、この経緯は無理もないことだと考えている。				
問三	ポチを毒殺しようとしていたのに、ポチは他の犬との喧嘩でも「私」の顔色を伺い、従順さを示しており、自分もポチとある種の一体感を持ち、そのポチを殺そうとしていることに罪悪感を抱き、自身への無力感でいっぱいになっている。				
問四	ポチを置き去りにしようしたり、ついには自分たちの焦躁感から殺そうとしたりしただけでなく、ポチの態度を自身に都合のよいように解釈し、皮膚病に侵されたことにも一切同情することはなかったのに、毒殺が失敗したとたんに、芸術家という特別な存在であることを盾にして、手のひらを返したようにまたも自身にとって都合のよい理屈で弁解を並べ立てて、良心の呵責を消し去ろうとしているような表現だから。				

(3)

問五	問四	問三	問二	問一			
				④	③	②	①
蜻蛉日記	これまで他の人たちのように真面目に仏道修行に励むこともなく、物語に描かれているような恋と風流の中で生きることを夢見てきたが、現実が厳しく、父と別れ、これからの暮らしをどうするかも覚束なく、人生の悲哀を感じざるをえないということ。	幼少の頃の作者を連れての東国赴任でさえ、自分に何かあったときは心配であったのに、まして今は大人になっており、田舎に見捨ておくことになったら大変であるので、作者を京に残すことにしたが、ここで別れると永遠の別れともなるから。	高貴で容貌の優れた男性に年に一度でもよいから自分のもとに通ってもらい、山里に隠し住まわされて風趣を味わいながら、心細げに男性からの手紙を待つような人生。	高貴で	前世からの因縁	勤行	

(4)

問四	問三	問二	問一
とであると、司馬光は批判したのである。	たれかえてこれをうたん。	臣下の立場でありながら暴力的に晋国を分割した三晋のことを、天子が諸侯とすることを許したくなかったとしても、三晋の力が強い以上、それを拒むことができるだろうか、いやできないだろう。	① おもへらく ② いやしくも
<p>礼義をおかし国を滅ぼし暴力的に自立するのは道理に背く行為であり、桓公や文公であれば礼義に基づいて征伐するであろう。ところが今、天子は三晋を征伐するどころか、請われると独立を許し諸侯として任じたが、これは礼義をおかすことを認めることである、つまり天子自らが礼を破ることであると、司馬光は批判したのである。</p>			